

いにしえの摂津市

明和池遺跡の発掘調査から



▲弥生時代の集落跡 発掘調査風景

摂津市と吹田市にまたがる吹田操車場跡地では、健康・医療のまちづくりに向けた「北大阪健康医療都市（愛称・健都）」の開発が進んでおり、摂津市域の千里丘新町では、マンション建設が行われています。

開発に伴い、平成22年から明和池遺跡の発掘調査が行われています。土の中から、大昔、この地に住んでいた人々が使った土器や建物の跡が見つかり、古くは約2千年前から生活していた様子がうかがわれます。

今号では、これまでの調査成果から見えてきた摂津の「いにしえ」をご紹介します。

明和池遺跡とは

池の底から土器発見

土の中から、大昔の人々が生活に使っていた土器や、建物の跡が見つかることがあります。そうした場所を遺跡と呼んでいます。市内には、現在22カ所の遺跡があり、その一つに、明和池遺跡があります。

遺跡は、摂津市の北西部、千里丘新町を中心に正雀川と山田川に挟まれた広い範囲に位置します。遺跡の名称は、江戸時代の明和年間

(1764～1771年)

に作られた明和池が由来で、昭和8年の工事の際に、池底から土器が発見され、遺跡として知られるようになりました。



▲池から発見された須恵器

古くから暮らしやすい土地

昭和62年、マンション建設に伴い、発掘調査が初めて行われました。古墳時代や奈良・平安時代の建物や溝の跡などが発見され、この地に古くから人々が暮らしていたことが明らかとなりました。

平成22年から、現在まで「健都」の開発に伴う発掘調査が行われています。調査の結果により、大昔の摂津市の様子が少しずつ明らかとなってきました。市内で最古となる、約2千年前の弥生時代の集落跡の発見や、約1千400年前の古墳時代の土器である須恵器生産に関わった人々の様子、奈良時代の「まじない」に関する遺物の出土など、各時代を通して興味深い発見が相次いでいます。

明和池遺跡の位置図



こんなことしてまっす 発掘の現場

現在、千里丘新町にある明和池公園の西隣では、マンション開発に伴う明和池遺跡の発掘調査が行われています。調査がどのように行われているのか、現場の様子を一部ご紹介します。

●遺構の検出

大昔の人が地面に残した跡を遺構といいます。土の違いを見極めながら、柱の穴や建物の跡を見つけていきます。



ジョレンという道具で地面を平らに削ります。



遺構のある場所は周囲と違う色で現れます。柱の穴の発見です。

●遺物の検出

当時の人々が使っていた茶碗や道具などを遺物といいます。調査では、遺物の発見が大きな魅力の一つです。



竹のヘラや、スコップなどで遺物の形を丁寧に丁寧に出していきます。

●土層の観察

発掘調査は、土の堆積を確認して上から下に掘り進めていきます。通常、下の層ほど古い時代の地層となります。



吹田操車場時の盛土
現代の田んぼの層
飛鳥～平安時代の土層
弥生～古墳時代の土層
自然の土層

古墳時代は弥生時代に続く時代で、今から約 1,700 ~ 1,400 年前にさかのぼります。土を盛り上げて作った「古墳」と呼ばれる権力者の墓が見られるようになる時代です。

古墳時代の摂津市では、当時の土器である須恵器の生産に密接に関わった工人たちの存在がうかがえます。

古墳時代

1,400 年前の摂津

女王「卑弥呼」で有名な弥生時代。今から約 2,300 ~ 1,700 年前の時代です。弥生時代は、大陸から米の作り方が伝わり、農業が本格的に行われました。

弥生時代の摂津市では、川べりに集落を作り生活していた様子や、当時貴重品であった青銅器を作っていた様子もうかがえます。

弥生時代

2,000 年前の摂津

須恵器とは

● 須恵器づくり

須恵器は、古墳時代から平安時代に作られた青灰色の焼き物です。5世紀に朝鮮半島から技術が伝わり日本で作られるようになりました。

須恵器は、山の斜面を利用した窯場で、約 1,200 度の高温で作られます。特徴は、煙が窯場から外へ漏れないように、粘土で覆い土器をいぶすことで頑丈に仕上げていることです。



▲ 須恵器づくりの様子 ※ 3

● 工人のつけた跡

竹のへらで「×」や「+」など記号をつけた須恵器があります。この記号は、工人や窯場の目印、または須恵器を発注した側の目印であると考えられています。



▲ へら記号のついた土器

状況 ▶ 出土した須恵器 ▼ 川跡から出土した



3千点以上の土器

千里丘陵から運搬 今から1千400 ~ 1千500年前の古墳時代の川跡から、須恵器と呼ばれる青灰色の焼き物がたくさん出土しました。その数は、3千点以上になります。須恵器は、歪んだものや、生焼けで白くなったものなど不良品が目立ちます。明和池遺跡の北側にある千里丘陵は、吹田市や豊中市を中心に、古代の一大窯業地として知られており、須恵器を作る窯場がたくさん見つかっています。そこで作られた須恵器と、発見

された須恵器は、造りがよく似ており、千里丘陵から運ばれた須恵器であると推定されています。 須恵器生産への関わり 明和池遺跡では、運ばれた須恵器を良品と不良品に選別し、不良品を川へ投棄していた様子がうかがわれます。明和池遺跡に隣接した吹田市の吹田操車場遺跡では、土器を作るための粘土を掘った穴がたくさん見つかっています。古墳時代、千里丘陵裾部の平野部一帯は、須恵器生産に関わった人々が住んでいたようです。

摂津最古の集落跡

■ 竪穴建物の発見

市内で現在確認されている中で、最も古い集落跡が発見されました。当時生活していた様子を示す竪穴（たてあな）建物と呼ばれる建物跡が見つかっています。竪穴建物は、現在の住居とは違い、地下に住まいを設けた建物です。

■ 川べりの暮らし

建物のすぐ近くから、大

▶ 竪穴建物跡



きな川の跡が見つかり、川べりから生活に使われていた弥生土器が出土しています。当時、こうした河川と関わりを持ちながら生活していた様子うかがえます。



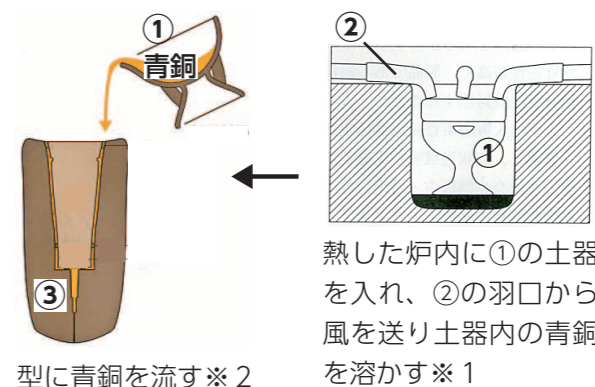
▲ 弥生時代の集落イメージ



▲ 出土した弥生土器

青銅器を作る道具

■ 青銅器作りの道具 (①高杯形土製品 ②羽口 ③鑄型)



▲ 青銅器の銅鑄を作る工程

■ 青銅器の生産 希少な事例

青銅器は、弥生時代、中国や朝鮮半島からもたらされ広まった金属器で、代表的なものに「鏡」や、豊穰を祝う鐘の「銅鐸」などがあります。当時は権力者が所有する貴重品でした。遺跡からは、銅鐸の破片と青銅器を作る道具がまと

まって発見されています。青銅器の生産を行っていた非常に珍しい事例です。 製作工程は、右のように、まず土を掘って炉を作り、高杯形土製品を入れ、内部に青銅の材料である銅とスズを入れます。送風管の「羽口」から風を送り、材料を熱し青銅を作ります。その後、製品の型に流し込み、作成していたようです。

飛鳥・奈良時代

1,200 ~ 1,400 年前の摂津

まじないの馬

雨乞い・疫病を防ぐ

土馬は、明和池遺跡の発掘調査により発見された7世紀中頃の飛鳥時代の遺物です。「まじない」の道具と考えられ、馬を捧げることや雨乞いを行った説や、よく首や脚が折れた状態で発

見されることから、疫病の神の乗り物である馬を動けなくして疫病の流行を防いだとする説があります。

本物の馬を再現

本物の馬を忠実に再現しようとする造形に工夫が見られます。特に、粘土の塊を貼

飛鳥時代・奈良時代は、都が築かれ、日本で律令国家が誕生しました。

飛鳥・奈良時代の摂津市では、干ばつや疫病を防ぐために、「まじない」の道具を使っていたようです。都から出土する事例の多い道具が見つかり、都との交流がうかがえます。



▲出土した土馬

り付け、馬具を備えた「飾り馬」を丁寧に表現しています。馬具は、馬を制御しやすいように取り付けられた装具で、土馬は、時代が新しくなるにつれ、大量生産さ

れるようになり、飾り馬の表現から、裸馬へと変化していきます。明和池遺跡から出土した土馬は初期のもので、類例の少ない貴重な遺物です。

人の顔をした土器

病を直す道具

奈良時代の川跡から、土器の表面に顔を描いた人面墨書土器（じんめんぼくしよどぎ）が発見されました。大昔の人々は、干ばつや疫病の流行を「まじない」によってはおうとしたように、人面墨書土器も、そうした道具の一つと考えられています。病は気からと言うように、大



▲人面墨書土器

昔においては、病は悪い気が体内に入って起こるものと考えられており、その悪

人々がいたのかも知れません。

モデルは布作面

描かれた顔については諸説あります。一つには、奈良時代の宝物庫「正倉院」に保管されている布作面（ふさくめん）です。布作面は、都での儀式に用いた面で、恐ろしい表情がよく似ています。その他、疫病神や鬼神とする説もあります。

都との交流示す

土馬やミニチュア竈（かま

ど）といった「まじない」に使用されたと考えられる遺物も一緒に見つかります。

こうした祭祀（さいし）の道具は、平城京・長岡京などの古代の都や、役所跡を中心に出土することが知られています。今回の発見により、摂津市域に、都と交流のある人物が存在した可能性が考えられます。摂津市に役所と関連する施設があったのかも知れません。



▶ミニチュア竈（右）
土馬（左）

市が保護する文化財 摂津市指定 有形文化財

土馬は、摂津市指定有形文化財に指定されています。市指定文化財とは、市内にある文化財の中でも、特に市にとって、後世に伝えていくために保護している文化財です。

現在、市が指定している文化財は2件あります。土馬と、もう一つは一津屋 2-18-13 に所在する大正時代の芝居小屋「旧一津屋公会堂」（写真右）です。



まじないの記号

人面墨書土器が出土した奈良時代の川跡から、「王」や「井」と書かれた土器が見つっています。文字が書かれた土器は、墨書土器と呼ばれます。

「王」の字を見ると、通常書き方とは違い、上から順に横棒が長くなっています。「井」という文字も「#」に近い書き方です。こうした文字は、「まじない」の記号と考えられており、他の祭具と一緒に見つかることが多いようです。



▶「井」墨書土器
▶「王」墨書土器

